

役割語

田中 愛子

令和六年一月十一日、皇居で「講書始の儀」が開かれ、天皇家のご長女愛子さまが初めてこの儀に出席されたことが報じられた。刑事訴訟法、物理化学と並んで、日本語学が専門の大阪大名誉教授金水敏氏による「ことばのステレオタイプ『役割語』について」と題する講義が行われたとのことである。

金水教授は、日本語は他の言語に比べて役割語が発達していると言及。役割語とは、「存じておりますわ」「知っているぜ」「知っておるのじゃ」といった、話し手の性別や年齢、品位が伝わる語である。

よござんす、祖母のたましひ、よござんす、口癖まねて、たましひを呼ぶ 大松達知『アスタリスク』
「よござんす」から、少しお年を召した上品な女性が想像される。

その役割語のひとつに「くたまえ」がある。社会的地位のある人が何か命令している場面が思い浮かぶ。しかし、

金水教授が著書『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』で指摘されているところであるが、白秋の「雨ふり」に出てくる坊ちゃん、子どもながら友達に「君君この傘さしたまへ」などと言う。地上に落ちてきた隕石の化身のような少年が「君、君、遊びに来たまへ」と誘う歌もある（「星ヶ浦」）。この「くたまえ」について教授は「武家ことば」を受け継いだ「書生ことば」から、さらに「少年語」に展開していったものとして著書で詳しく述べておられる。

さて、ものごとには必ずおわりが来る。食事のおわり、ドラマのおわり、一日のおわり、と日々無数にあり、もちろん人生の節目節目のような大きなおわりもある。

「ご勇退おめでとー」とぞ言はれたり「卒業おめでとー」と言ひし返しに 桑原正紀『花西行』

桑原さんが教職を退く日の歌である。おわりを示すことばの中にも、ある物事のおわりと対応することばがある。いわば、「おわりの役割語」といったものである。「ちようど時間となりました」は講談。「お後がよろしいようぞ」なら落語。「これにて一件落着」といえば遠山の金さんだ。「お開きになる」は何かお祝い事の締め。「卒業」も一般的な意味の他に、アイドルがグループを抜け、芸能活動に一区切りをつけるという特定の意味で使われることもある。

さあ、そろそろ私もこのあたりで文豪を少し気取って、「日本語こぼれ話」の筆を擱くことにしましょう。